

# 留学体験のインパクトと成果

—留学経験者と留学非経験者の比較調査から—

## Impact and Results of Study Abroad:

Japanese who studied abroad compared with those who did not

明治大学国際日本学部准教授 小林 明

KOBAYASHI Akira

(School of Global Japanese Studies, Meiji University)

キーワード：海外留学、留学経験、留学インパクト、グローバル人材

### はじめに

海外留学の体験とその意義や成果、効果については国内外でさまざまに論じられてきた。特に今世紀に入った一時期日本人の海外留学者数の減少がマスコミで騒がれ、グローバル化に対応せざるを得ない経済界は、世界の舞台で活躍できる有能な人材を求める傾向を示し、政府もそうした動向にこたえる形で教育及び社会の国際化に向けて、日本人の海外留学を支援する政策<sup>1</sup>を次々と打ち出してきた。

筆者も海外留学を推進する立場から、現場でプログラムの企画、実施、管理に携わる傍ら、2011年の『留学交流』(vol. 2)で日本人学生の海外留学阻害要因と対策<sup>2</sup>について、2013年の『留学交流』(vol. 29)では留学が社会人参加者に与えた影響<sup>3</sup>について、そして2015年の『留学交流』(vol. 53)では、筆者も参加した科研「グローバル人材育成と留学の長期的なインパクトに関する国際比較研究」<sup>4</sup>の調査結果と2013年の調査研究との比較分析を行い、留学のインパクトが留学後の時間経過によっ

<sup>1</sup> 大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業(G30)(2009-2014)、グローバル人材育成推進事業(2012-2016)、大学の世界展開力強化事業(2011-)、スーパーグローバル大学創成支援事業(2014-2023)など文部科学省の補助金による推進事業。

<sup>2</sup> JASSO ウェブマガジン『留学交流』2011年5月号 Vol. 2を参照のこと。

<sup>3</sup> JASSO ウェブマガジン『留学交流』2013年8月号 Vol. 29を参照のこと。

<sup>4</sup> 「グローバル人材育成と留学の長期的なインパクトに関する国際比較研究」平成25～27年度文部科学省科学研究費助成事業基盤研究A(研究代表者 横田雅弘)

ておこる変化<sup>5</sup>について発表した。

本稿では、上記の科研の報告として発行されたサマリーレポート『グローバル人材育成と留学の長期的なインパクトに関する調査』(2016)を基に、これまで発表されてきた新見・太田・渡部・秋庭(2016)、米澤・新見(2016)の発表内容を参考にまとめてみた。特に、留学経験者に対する留学非経験者を比較することで留学体験のインパクトをより客観的な視点で捉えることを試みている。

## 1. 調査の概要

### 1. 調査の目的

今回の調査は、留学が人生においてどのようなインパクトをもたらしたかに関する長期的な影響を把握するために実施されたものである。

### 2. 調査方法・対象

今回の調査は、2015年8月～9月にかけて調査関係者による依頼ならびに調査会社により行ったインターネット調査である。

調査対象者の留学経験者とは、「義務教育は主に日本で受け、日本の高校卒業後に3か月以上の海外留学を経験した人で、留学機関は、高校、大学、大学院、職業・専門学校、語学学校に限定し、ボランティアやワーキングホリデーは含んでいない。」こととした。

留学非経験者は、「国内の大学卒もしくは大学院卒業者。日本にある企業に勤めている人か主婦あるいは無職の人で、3か月以上の海外留学や海外在住経験がなく、帰国子女でない人。さらに大学入学前にインターナショナルスクールに通っていたり、家庭内で外国語を使用していなかったりなど外国語運用力をつけていなかった人」とした。

### 3. 回答者の属性

今回の回答者の属性を留学経験者と留学非経験者の比較で見ると、有効回答4,489名の留学経験者と比較グループとしての留学非経験者1,298名で、詳細は次の表1のようになっている。年代では、40歳代と30歳代がそれぞれ30%以上で70%弱と高い構成率であるが、50歳代も約20%、20歳代以下も10%強と経験者・非経験者ともにほぼ同様の割合を示している。

性別では男女ほぼ50%である。留学時の学校種別で比較すると、留学経験者には高校3.2%、語学学校31%、その他7%の合計41.2%が含まれるので、留学非経験者と比較するためにそれらを除いたものを示しているが、留学経験者の大学比率が約20%高くなっている。

<sup>5</sup> JASSO ウェブマガジン『留学交流』2015年8月号 Vol. 53 を参照のこと。

表1 回答者の属性

	年代	
	留学経験者	留学非経験者
50歳代以上	20.2	17.0
40歳代	35.2	34.7
30歳代	31.5	33.7
20歳代以下	13.0	14.6
	性別	
	留学経験者	留学非経験者
女性	50.9	50.2
男性	49.1	49.9
	教育レベル	
	留学経験者*	留学非経験者
大学	70.8	54.7
大学院修士	21.5	35.5
大学院博士	7.7	9.8

\*高校、語学学校、その他の学校種別を除いた割合

#### 4. 調査項目

調査項目の領域は「価値観の醸成」「能力の向上」「年収と役職」「キャリアへの影響」「授業や課外活動に対する積極性」「人生や仕事の満足度」「行動の変化」を設定した。今回の調査の主目的である留学経験者と留学非経験者の比較を行うために、内容的には齟齬のない質問設定を試みたが、留学経験者には海外留学の経験に関連付けた質問とし、留学非経験者に対しては、国内の大学・大学院での経験や向上した能力、卒業（修了）後のキャリアといった視点からの質問に置き換えた。

### II. 調査結果と考察

#### 1. 価値観の醸成

海外留学の結果（留学非経験者には、【大学・大学院の卒業（修了）の結果】）、次のような意識がどの程度高まったと思うかという質問に対して、図1及び図2に示す結果が得られた。表の色分けでみると赤色で示している「つよくそう思う」とオレンジ色の「そう思う」を留学経験者と非経験者と比較すると前者の占める割合が相当大きいことが分かる。具体的にみると両グループ間の顕著な差は、留学経験者と留学非経験者の全体的な意識変化をみればより明確であり、①国家・地域・地球に関する帰属感、②平和や外交、宗教、地球的な課題への関心などグローバル社会への関心、そして③自己効力感や自己肯定感といった自分自身の変化の3領域16項目いずれにおいても留学経験者が2倍から4倍もの肯定的な意識の変化を認識している。

図1 留学による価値観の醸成（留学経験者 4,489人）

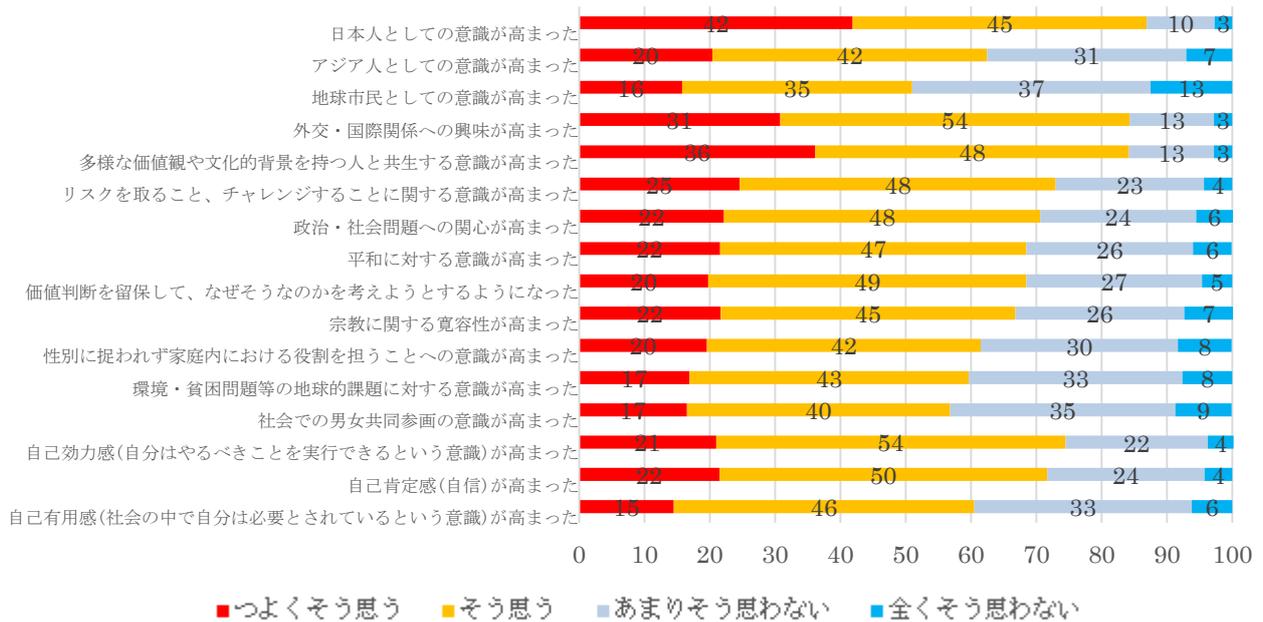
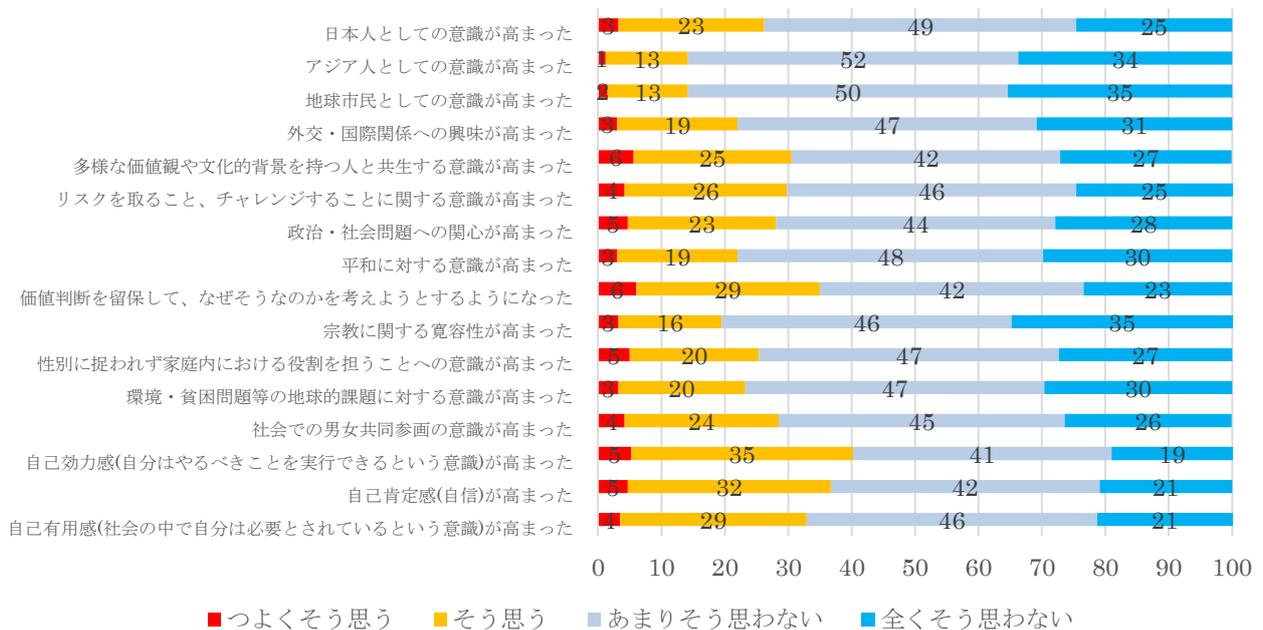


図2 留学による価値観の醸成（留学非経験者 1,298人）



3つの領域別にみると、グローバル人材の認識として重要である①国家・地域・地球に関する帰属感については、「アジア人としての意識」（留学経験者 63%、留学非経験者 14%：以下留学経験者と留学非経験者の数字をこの順で記載する）や「地球市民としての意識」（51%、14%）の醸成がみられ、留学経験者は留学非経験者に比べてそれぞれ 4.4 倍、3.6 倍と全項目中 1 番目と 3 番目の大きな差を示した。「日本人としての意識」は、「つよくそう思う」（42%、3%）、「そう思う」（45%、23%）となり、両者を合わせると留学経験者 87%、非経験者 26%であり、これも大きな差を示している。留学

により異文化との接触や異文化を背景とする人々との交流によって、自分自身の帰属やアイデンティティについて考えさせられた結果の反映であると推察できる。海外留学が個人にもたらす重要な変化を示しているといえよう。

次に大きな変化がみられるのは、②平和や外交、宗教、地球的な課題への関心などグローバル社会への関心についての項目である。特に「外交・国際関係への興味」(84%、22%)は3.8倍の違いがあり、全項目中2番目の大きな差を示した。同じく高い変化を認識した項目は、「多様な価値観や文化的背景を持つ人と共生する意識」(84%)、「リスクを取ることに、チャレンジすることに関する意識」(73%)、「政治・社会問題への関心」(71%)と続き、いずれも非経験者の意識変化と比較すると2.8倍から2.4倍という高い数値を示した。10項目中60%に届かなかったのは唯一「社会での男女共同参画の意識」(留学経験者で57%)だったが、非経験者との比較では2倍の意識の高まりを示している。

自己効力感や自己肯定感といった自分自身の評価に関する質問についてみると、「自己効力感(自分はやるべきことを実行できるという意識)」が(75%、40%)、「自己肯定感(自信)」が(72%、37%)、「自己有用感(社会の中で自分は必要とされているという意識)」(61%、33%)で、留学経験者が約2倍となった。

以上のことから海外留学の経験は、留学を経験しなかった者と比較して、より前向きで肯定的な価値観の醸成につながっているといえるのではないだろうか。

## 2. 能力の向上

18項目の能力の向上については図3と図4の比較で明らかなように留学経験者はほぼ全項目において平均80%に近い高い割合で能力の向上を認識しており、留学非経験者の50%と比べるとその違いが明確である。特に「留学先の文化社会に関する知識」、「外国語運用能力」、「異文化に対応する力」の3点において差が大きい。

能力の向上に関する差が10%未満であったものは3項目で、専門知識・技能(74%、73%)、論理的思考力(68%、60%)、協調性(74%、63%)であった。それ以外の能力の向上に対する認知は20%から40%近い差がみられた。

留学経験者のこれら能力の向上は、留学期間中の多様な外国人とのコミュニケーションや外国語による授業や多文化社会での生活などを通じた体験を通して獲得したことを示唆していると言えるのではないか。

図3 能力の向上(留学経験者)

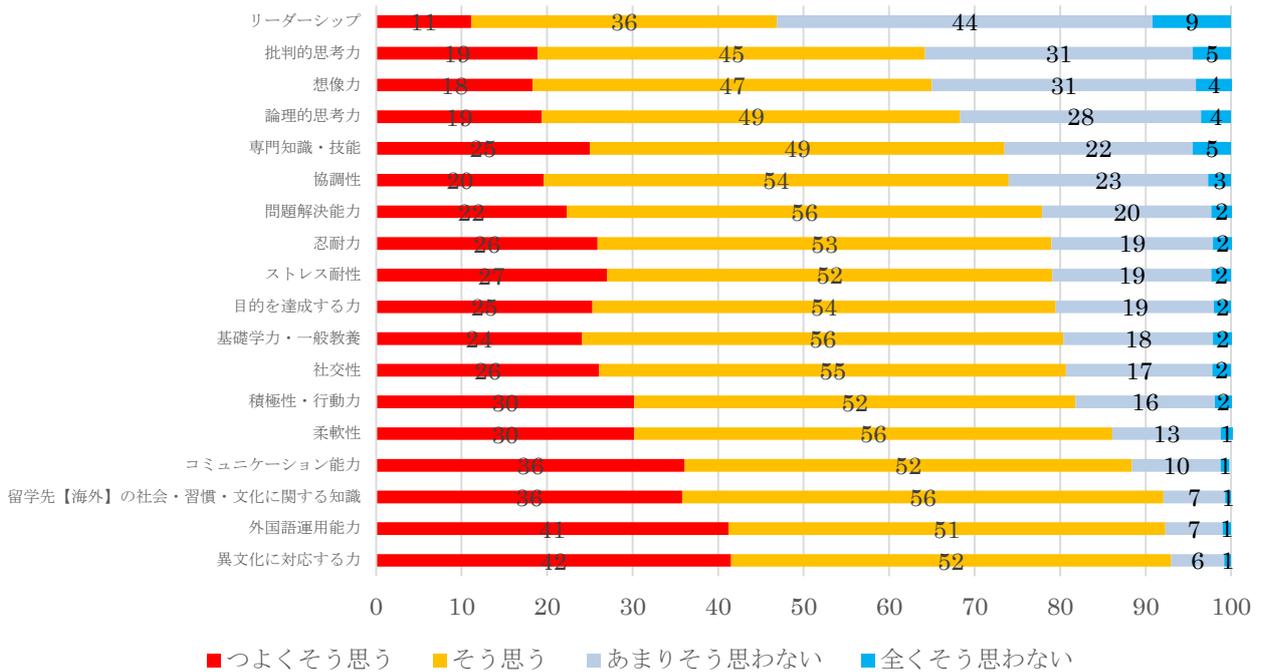
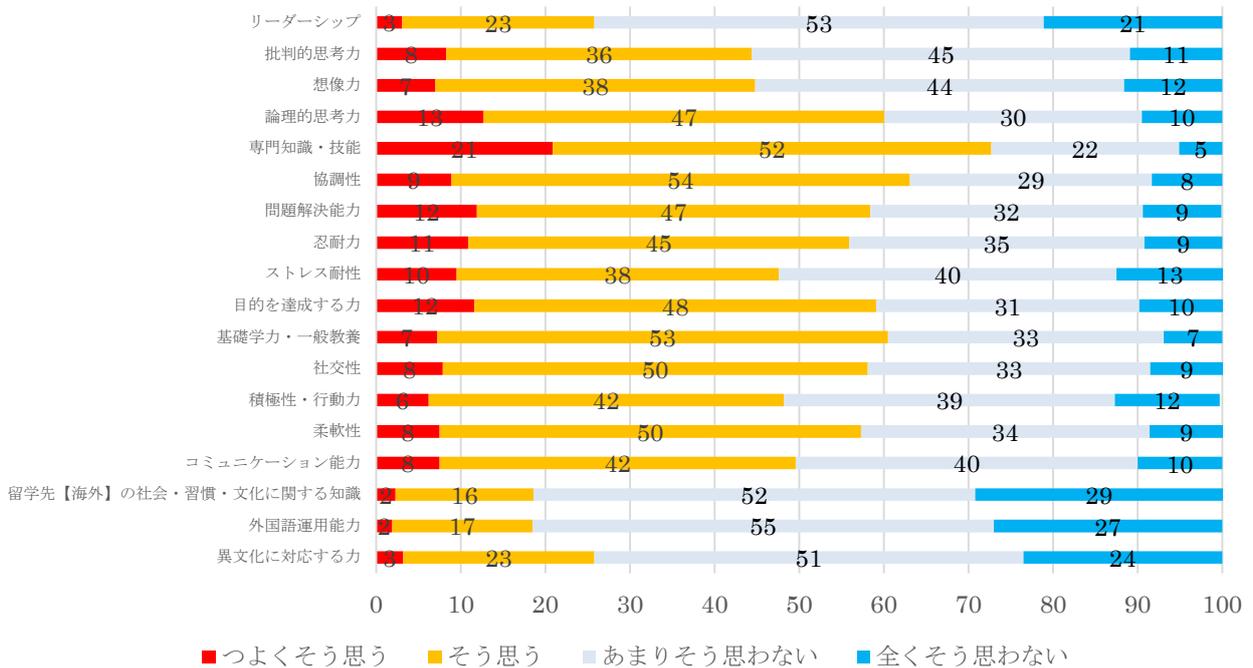


図4 能力の向上(留学非経験者)



以上のことから、留学経験者と留学非経験者とでは、2011年にグローバル人材育成推進会議により中間報告として発表された「グローバル人材」の定義にある要素Ⅰ～Ⅲ（図5）や能力水準など自己評価における達成感に大きな差が認められることが分かる。

図5 グローバル人材の定義  
グローバル人材育成推進会議資料2から引用

○「グローバル人材」の概念を整理すると、概ね、以下のような要素。  
 要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力  
 要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感  
 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

○このほか、幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと(異質な者の集団をまとめる)リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等。

○グローバル人材の能力水準の目安を(初歩から上級まで)段階別に示すと、  
 ① 海外旅行会話レベル ② 日常生活会話レベル ③ 業務上の文書・会話レベル  
 ④ 二者間折衝・交渉レベル ⑤ 多数者間折衝・交渉レベル

この中で、①②③レベルのグローバル人材の裾野の拡大については着実に進捗。今後は更に、④⑤レベルの人材が継続的に育成され、一定数の「人材層」として確保されることが極めて重要。

(出典)「グローバル人材育成推進会議中間まとめ」(2011年6月) グローバル人材育成推進会議3

### 3 キャリアへの影響

#### 3-1 就職活動への影響

以下の図6と図7で明らかのように、留学経験者は採用において留学経験が肯定的に作用したと認識しているのに対して、留学非経験者は大学・大学院での経験をあまり評価されたと認識していない。

留学経歴／国内大学卒業・大学院修了(56.1%、46.3%)、語学力(56%、7.1%)、知識・スキル(53.2%、41.7%)、外国人とのコミュニケーション経験(55.6%、6.2%)となり、留学経験者が高いのは当然とは言え、国内の大学・大学院での教育では、外国語や外国人とのコミュニケーションの力を採用側に評価されることはほとんどないと感じていることがわかる。

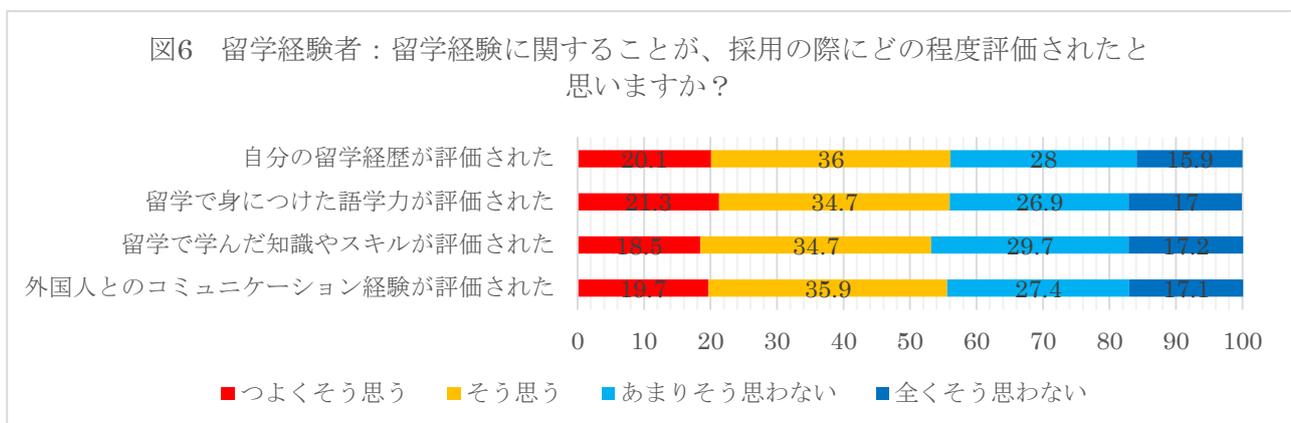
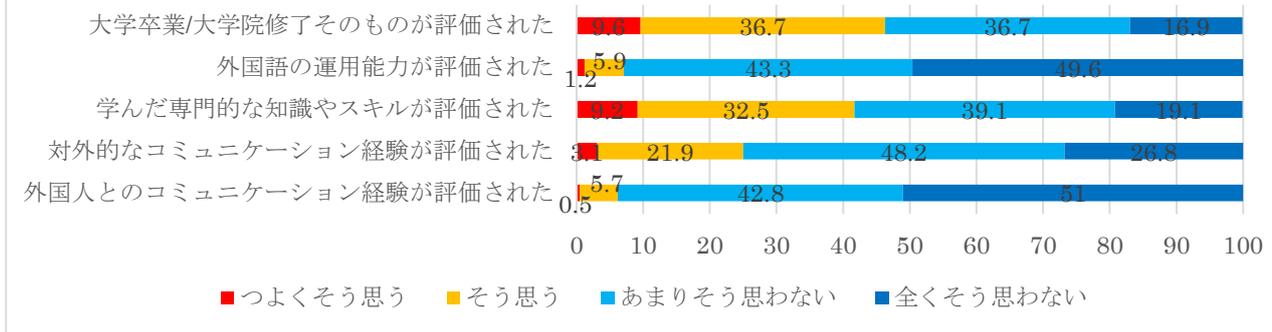


図7 留学非経験者：大学・大学院での経験に関することが、採用の際にどの程度評価されたと思いますか？



「留学経歴/大学卒業・大学院修了そのものが評価された」と認識している者について、学校種別の集計で留学経験者の順位をもとにもう少し詳しくみると、文科系修士・博士（82.2%、41.4%）、学士女性（72.8%、46%）、理工系修士・博士（70.9%、69.4%）、学士男性（66.4%、37.7%）となっており、経験者と非経験者の間には理工系修士・博士を除き、ほぼ20～30ポイントの開きがある。

「留学/国内大学・大学院で学んだ専門的な知識やスキルが評価された」と認識している者について留学経験を基準として評価順に並べると、文科系修士・博士（84.2%、58.7%）、理工系修士・博士（76.4%、52.5%）、学士男性（70.6%、29.7%）、学士女性（66.7%、30.3%）の順になり、「国内の大学卒業・大学院修了そのものが評価された」と認識している者の順位は、先の「留学経歴/大学卒業・大学院修了に対する評価」とは多少前後するものの評価比率はほぼ同様の結果を示している。

留学経験者と留学非経験者の評価に大きな差を示した「留学で身につけた語学力/外国語運用能力が評価された」と認識している者については、文科系修士・博士（79.2%、9.2%）、学士女性（73.7%、5.1%）、学士男性（68.7%、5.7%）、理工系修士・博士（63.6%、8.8%）となり、留学経験者が70から55ポイントも高くなっている。

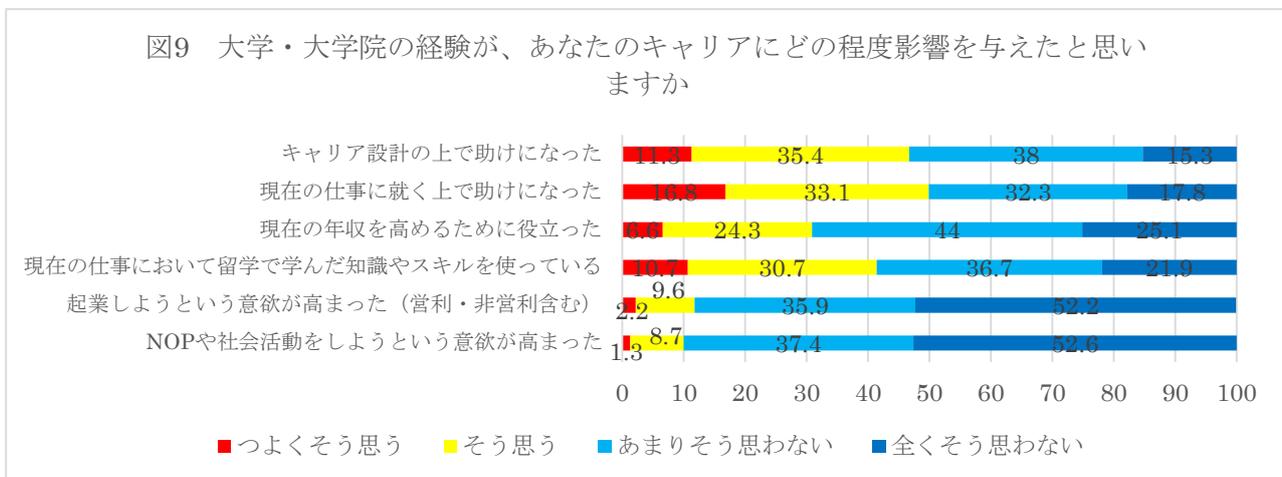
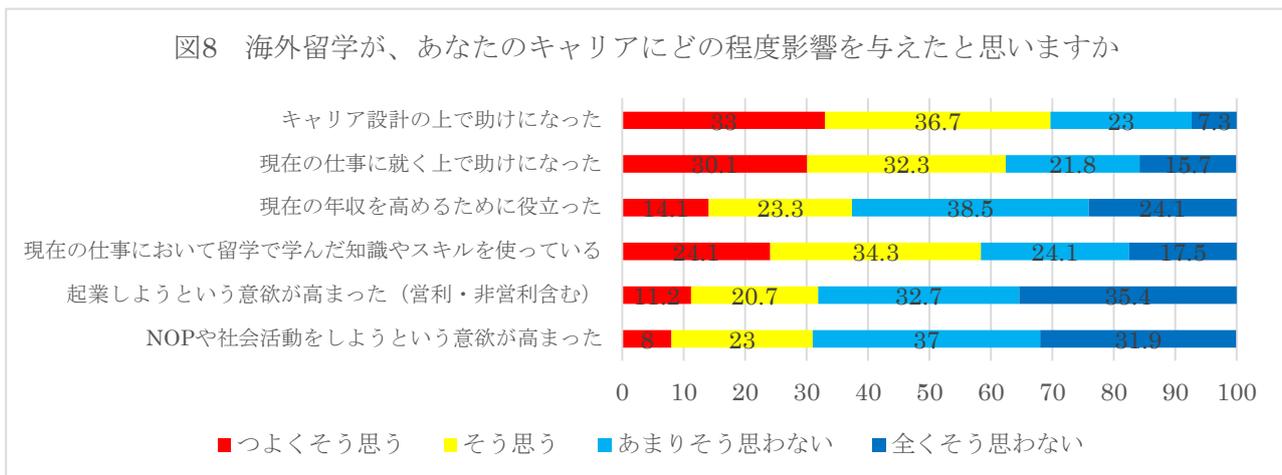
「外国人とのコミュニケーション経験が評価された」についても、文科系修士・博士（76.8%、8.2%）、学士女性（69.7%、3.4%）、学士男性（65.4%、6.3%）、理工系修士・博士（63.6%、8.1%）と留学経験者と留学非経験者にそれぞれ60ポイント前後の大きな差がみられた。

以上のことから、グローバル人材育成の要素Ⅰとして指摘されているコミュニケーション能力や外国語能力などについては、上記Ⅱの2で明らかなように留学経験者は18項目の能力中ほぼ全項目で80%近い高い割合で能力向上を自覚しており、採用側にも評価されていると認識していることが分かる。他方、国内大学卒業・大学院修了者が採用にあたってそれらの点では殆ど評価されていないと認識している。留学非経験者の国内の大学や大学院での経歴および学んだ専門知識やスキルについては、採用時に一定程度の肯定的な評価を受けたと認識しているようであるが、留学経験者と比較すると10ポイント程度劣っており、留学経験者がより大きな影響を受けていることを示唆している。

### 3-2 キャリア設計への影響

就職活動への影響については図8と図9が示す通り、留学経験者と留学非経験者との間には明確な違いが見られた。キャリアへの影響について両者を比較すると、キャリア設計（69.7%、46.7%）、現在の仕事への就職（62.4%、49.9%）、学んだ知識やスキルの使用（58.4%、41.4%）においては留学経験者がいずれも60%前後の評価を示しているが、留学非経験者は50%に届いていない。現在の年収を高めること（37.4%、30.9%）については、米澤・新見(2016)にもあるように留学経験が影響を及ぼすほどの効果を見出しにくい状況のようである。

双方とも30%程度と比較的低い評価の年収は別として、留学経験者の約70%が留学をキャリア設計への影響、約60%が現在の仕事への就職と就職後の仕事で学んだ知識やスキルが役立っていると高く評価している。留学非経験者はいずれの評価についても留学経験者と同様の傾向がみられるが、留学経験者よりも20%から6.5%下回っている。留学非経験者が約10%と影響を低く評価している起業やNPOなど社会活動への意欲については、留学経験者はいずれも30%強と20ポイント程度高く評価していることからキャリア設計から就職活動においては一定程度の影響があると認識していると考えられる。



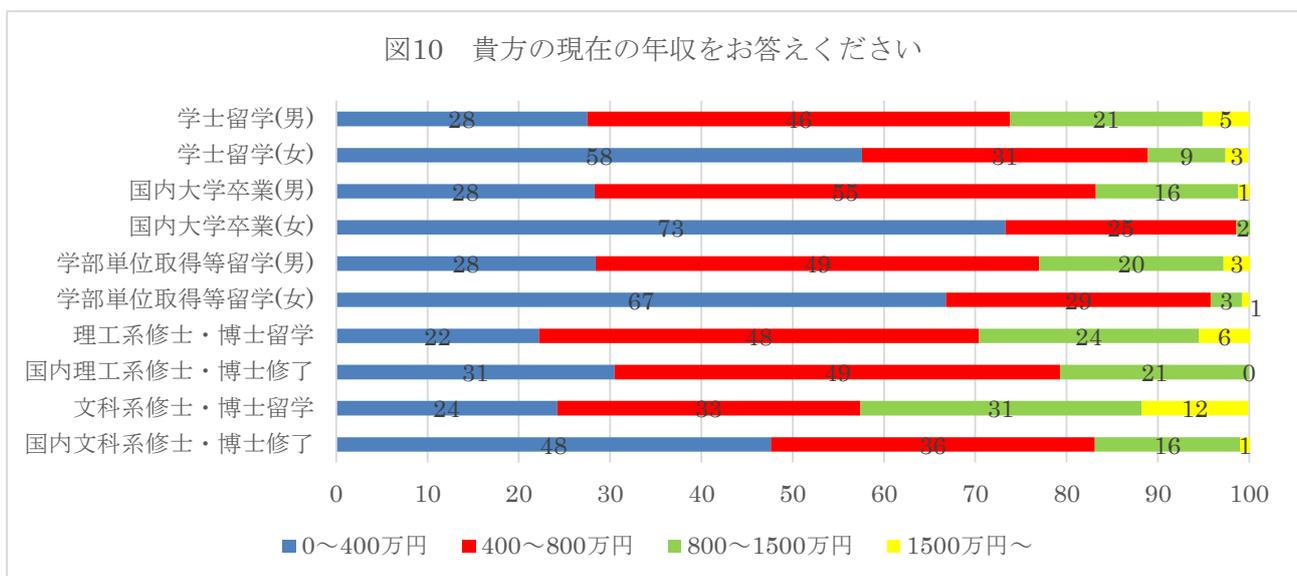
大学・大学院に限って学校種別にみると、大きな差がみられる。特に「キャリア設計の上で助けになった」とする文科系修士・博士留学（92.6%、59.6%）、学士留学男性（80.8%、35.9%）、学士

留学女性（80.3%、36.7%）、理工系修士・博士留学（80%、59.4%）と留学経験者はいずれも80%以上で留学非経験者よりも45から20ポイント高い評価がみとめられた。「現在の仕事に就く上で助けになった」と「現在の仕事において留学/大学・大学院で学んだ知識やスキルを使っている」という項目でもほぼ同様の比率を示したが、「現在の年収を高めるのに役立った」では、留学経験者と留学非経験者ともに全体の傾向は類似しているものの、「つよくそう思う」「そう思う」の合計は、上記2項目と比べて留学経験者が40%～50%、留学非経験者も15～20%低い数値となっている。

### 3-3 年収

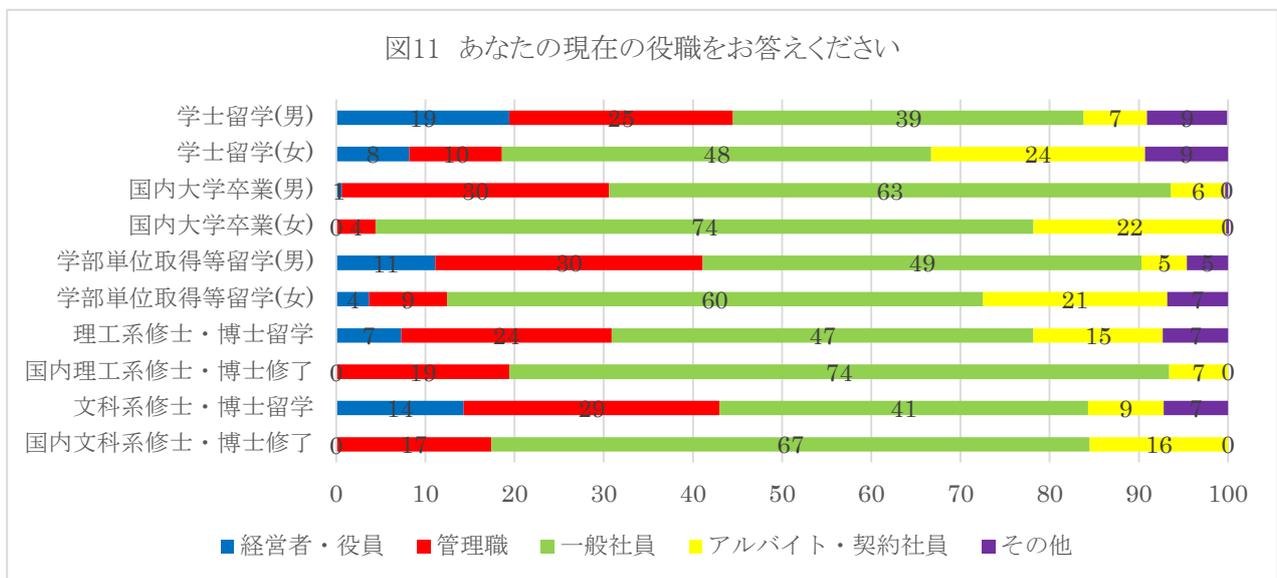
留学経験者と留学非経験者との年収の違いは、高額所得者の割合が留学経験者に高いことである(図10)。年収800万円以上をみると文科系修士・博士留学(43%、17%)、理工系修士・博士留学(30%、21%)、学士留学男性(26%、17%)、学士留学女性(11%、2%)の順になっている。大学院留学経験者の年収は、年齢層が比較的高いということと文科系修士留学にはMBAが少なからず含まれていることは考慮すべきだが、文系・理工系を問わず800万円以上がそれぞれ40、30%と高くなっており、国内就学グループに1500万円以上が殆どみられないことから、留学経験が年収に結びついているといえるのではないだろうか。

もう一つ明確なことは、男女の差である。男性は、学士留学、学部単位取得等留学ともに800万円を超える年収が20%半ばであり、国内の大学院修了者の20%をも上回っている。男女で比較すると確かに女性の年収は学士留学、学部単位取得留学、国内大学卒業の如何を問わず相対的に大変低い。800万円以上に限定すると学士留学女性(12%)に対して国内大学卒業女性(2%)と留学した女性の方が10ポイント高く、米澤・新見(2016)が指摘するように年収を高める効果はみとめられるが、男女の年収の差まで解消するほどの影響はない。



## 3-4 役職

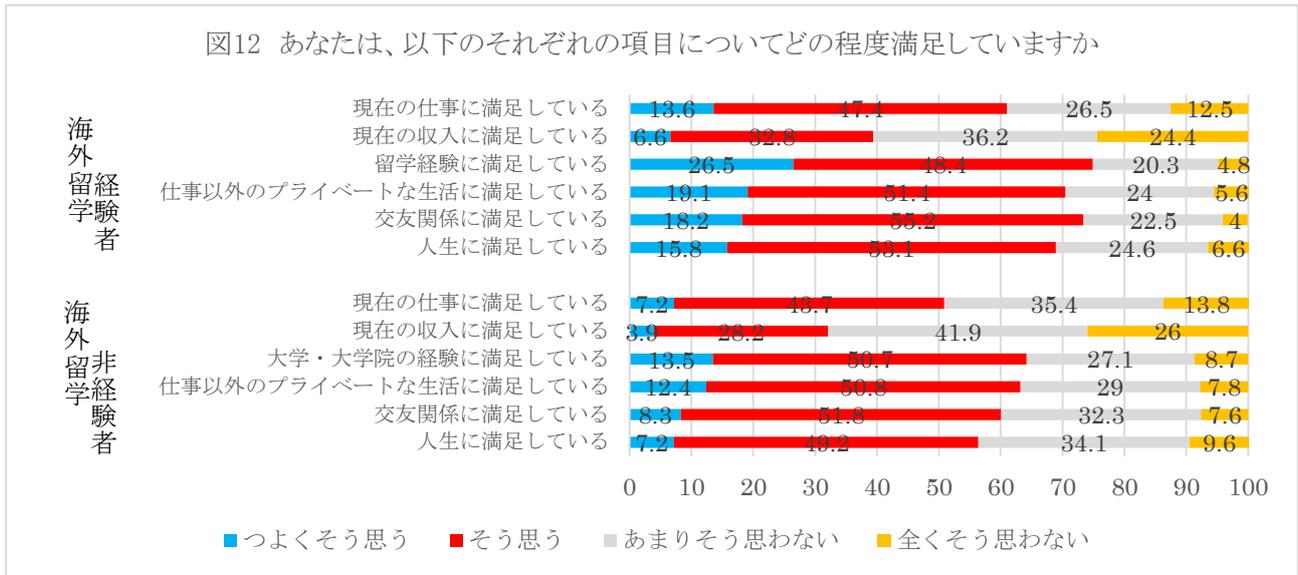
役職については、より多くの留学経験者が高い地位についている結果（図11）を示した。経営者・役職者に管理職を加えると、学士男性(44.5%、30.6%)、文科系修士・博士(43%、17.4%)、理工系修士・博士(30.9%、19.4%)、学士女性(18.6%、4.4%)で、米澤・新見(2016)にあるように留学経験者の役職についている比率が高いことが分かる。経営者・役員に限定すると学士男性(19%、0.6%)、文科系修士・博士(14.3%、0%)、学士女性(8.2%、0%)、理工系修士・博士(7.3%、0%)と、いずれの学校種別でも留学経験者が高い。留学グループでは一番少ない学士留学女性(18.6%)でも管理職で比較すると、国内理工系修士・博士(19.4%)、国内文科系修士・博士(17.4%)とほぼ同じ比率であることから、留学がキャリアへ大きく影響していると言えるのではないだろうか。



## 4. 人生や仕事の満足度

図12に示している通り、留学経験者が70%前後、留学非経験者が60%前後と双方とも比較的高い満足度を示しており、際立って大きな差が見られない。交友関係に対する満足度(73.4%、60.1%)、仕事以外のプライベートな生活に対する満足度(70.5%、63.2%)、人生に対する満足度(68.9%、56.4%)、現在の仕事に対する満足度(61%、50.9%)、現在の収入に対する満足度(39.4%、32.1%)といずれも10ポイント未満の差であり、その差はほぼいずれの項目でも「つよく思う」割合において、留学経験者が約10%高いことがそのまま反映されている。現在の収入に対する満足度はいずれも30%台と低い、それ以外の項目では留学経験者が70%前後、留学非経験者が60%前後の比較的高い満足度を示している。

図12 あなたは、以下のそれぞれの項目についてどの程度満足していますか



5. 留学による行動の変化

海外留学の結果、【留学非経験者には、大学・大学院の卒業(修了)の結果、】以下7つの行動への関わりがどの程度多くなったと思うかという質問に対する回答である。高校留学、学士留学、学部単位取得等留学、文科系と理工系の大学院修士・博士の留学経験者に対して、国内大学卒業・大学院修了グループの回答と比較したものである。

〈地域などへの貢献・支援活動〉

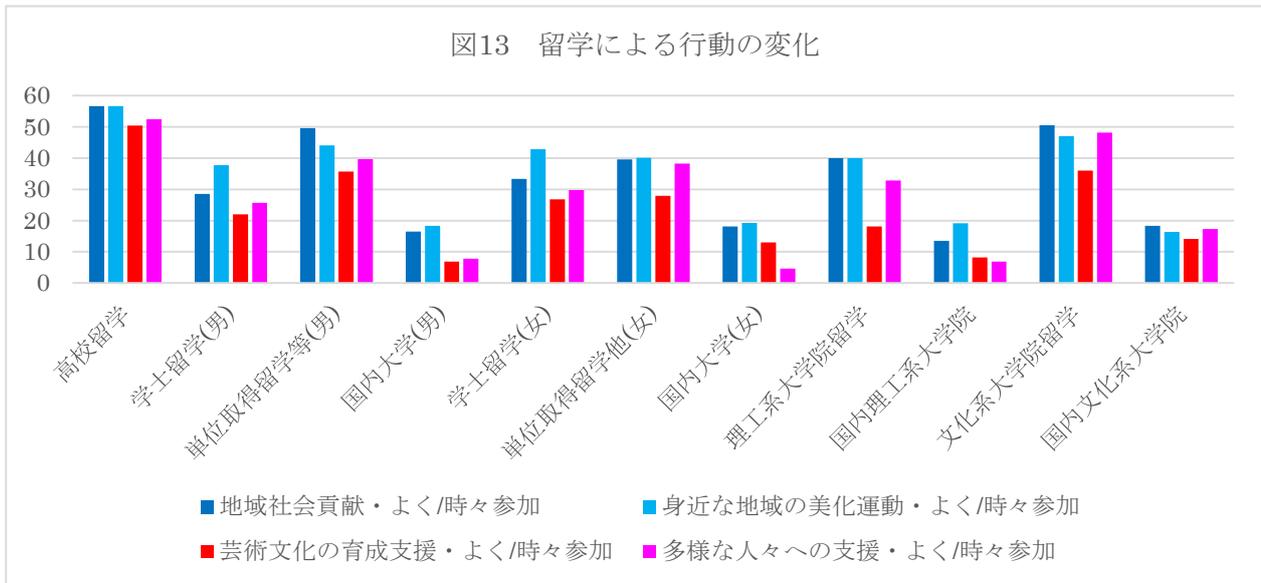
- ①地域社会への貢献活動
- ②芸術文化の発展・育成支援活動
- ③身近な地域の環境美化運動など
- ④多様な価値観や文化背景を持つ人々への支援活動

〈多様な人々との交流活動〉

- ⑤多様な価値観や文化背景を持つ人々への交流活動
- ⑥多様な年齢・世代の人々との交流活動
- ⑦多様な分野で活躍している人々との交流活動

5-1 地域社会への貢献・支援活動

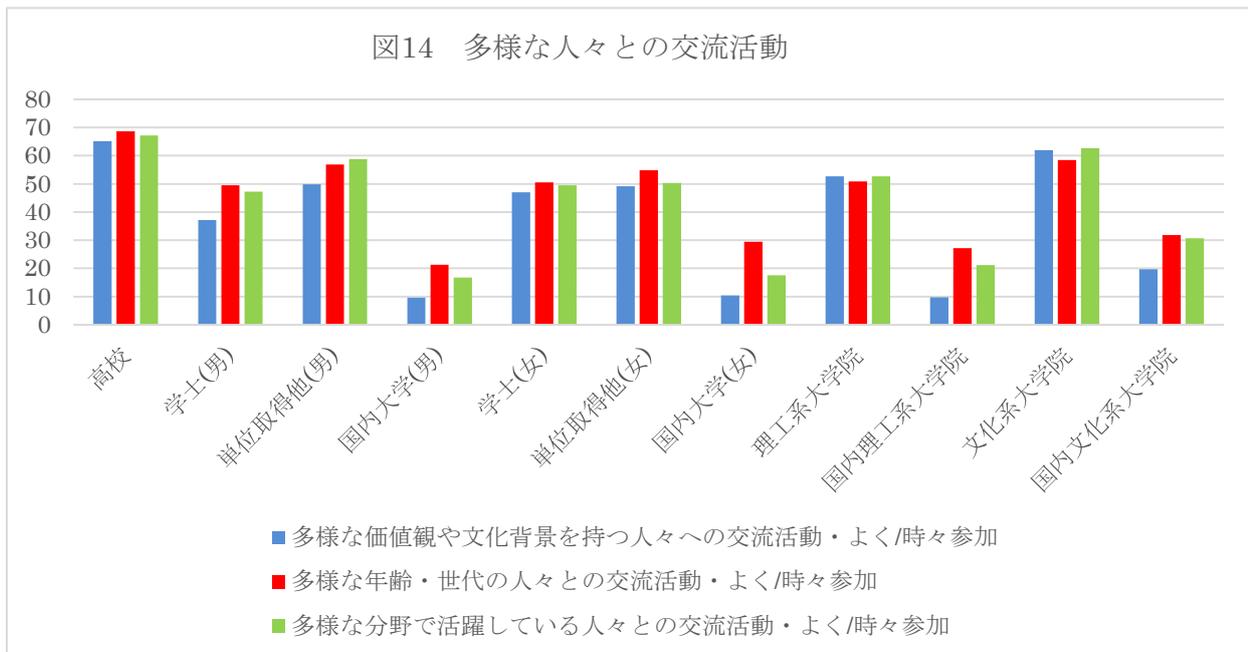
上記7つの内、①～④を地域などへの貢献・支援諸活動、⑤～⑦を多様な人々との交流という視点に分けてみるができる。まず、地域などへの貢献・支援諸活動に対する回答結果としては、図13に見られるように、留学経験者は学校種別に関係なく、ほぼ40～50%が地域社会への貢献・支援活動や運動に参加している。それに対して国内の大学卒業・大学院修了グループは学校種別に関係なく参加率がいずれの活動も10～20%未満と低調であることが分かる。留学経験者の中では、特に高校留学はいずれの活動においても50%を超える点で際立っているが、その他の学校種別間では大きな差は見られない。



以上のように留学経験者の地域社会への貢献・支援活動は、新見・太田・渡部・秋庭(2016)にあるように留学中の様々な社会的な活動への参加経験が、社会全体に対する貢献意欲や姿勢を身につけることで帰国後のより積極的な行動を誘発するという可能性を示唆していると考えられる。

## 5-2 多様な人々との交流活動

⑤「多様な価値観や文化背景を持つ人々」、⑥「多様な年齢・世代の人々」、⑦「多様な分野で活躍している人々」との交流活動の参加状況(図14)をみってみる。3つの交流活動の平均参加率を留学経験者と留学非経験者とで比較すると、文科系修士・博士(61.0%、27.4%)、理工系修士・博士(52.1%、19.3%)、学士女性(50.2%、19.1%)、学士男性(49.8%、19.6%)となった。



留学経験者の大学・大学院レベルでの交流活動状況は、交流相手により若干前後するもののいずれも50%~60%と多くなっている。他方、留学非経験者は、国内文科系修士・博士修了が一番多くて平

均 30%弱であり、その他 3 グループはいずれも 20%にも満たず、留学経験者の方がより多く、より積極的に参加していることを示している。留学非経験者については特に 10%未満と低くなっている⑤「多様な価値観や文化的背景を持つ人々」との交流活動のみならず、⑥、⑦の交流活動も極端に少ないことがわかる。これらのことから留学経験者は、国内における比較的狭い社会空間での限定的な人々と交流している留学非経験者と異なり、留学先で様々な人種や国籍、年齢層や社会階層の人々との接触を体験することで、多様な人々との交流に違和感を持たなくなり、そうした人々と積極的に交流するようになったことを示唆しているのではないだろうか。

多様な人々との交流活動にもっとも積極的なのは、⑤～⑦いずれの交流活動においても約 70%を示した高校留学である。高校留学は、比較的感受性の高い（多感な思春期の）若い年代での留学あるいは留学前の国内での社会的活動体験がほぼ皆無に近い留学という特徴があり、ホームステイを通じた幅広い人たちとの断続的かつ多様な交流機会の影響で、その他の留学経験者よりも多様性に対する意識や行動がより強い影響を受けるようになったのではないだろうか。

以上のことから、留学経験者の地域社会への貢献・支援活動や多様な人々との交流活動に対する行動の変化は留学非経験者と比較して、明らかに肯定的に評価、自覚しており、「グローバル人材」の要素 II（主体性・積極性、チャレンジ精神など）において留学非経験者を上回る行動の変化を獲得していると考えられる。新見・太田・渡部・秋庭(2016)が指摘しているように、留学経験はグローバル社会において活躍するために必要な基本的な能力、意識や価値観の涵養において、効果的な学びの機会をもたらしていると言えるのではないだろうか。

おわりに

今回の調査によって、留学経験者と非経験者との間には、価値観の醸成、能力の向上、年収と役職、キャリアへの影響、留学経験、教育経験の評価、人生や仕事の満足度、教育経験後の行動の変化などの領域で、明らかに大きな差が見られることが分かった。新見・太田・渡部・秋庭(2016)にもあるように留学経験者は、特に能力の向上、意識の変容、社会活動への参加、態度・価値観の変化、キャリア・採用への影響、人生の満足度という 6 つの領域において、留学経験を通じて強いインパクトを受けているといえよう。留学経験者がグローバル人材に求められる各種要因を留学非経験者よりも格段に多く広範囲に習得していると考えられる。

この小論は、「グローバル人材育成と留学の長期的なインパクトに関する比較調査研究」サマリーレポート(2015)をまとめたものであるが、より詳細な分析が新見・太田・渡部・秋庭(2016)や米澤・新見(2016)などで行なわれている。関連する発表や論文等については、下記を参照されたい。

「日本の留学交流の活性化を目指すグローバル人材 5000 プロジェクト」のホームページ  
<<http://recsie.or.jp/project/gj5000/>>

参考文献

1. 小林明 (2011) 「日本人学生の海外留学阻害要因と今後の対策」 独立行政法人日本学生支援機構ウェブマガジン『留学交流』2011年5月号 Vol. 2
2. 小林明 (2013) 「留学プログラムが参加者に与えた影響に関する調査 —社会人としての留学体験評価—」 独立行政法人日本学生支援機構ウェブマガジン『留学交流』2013年8月号 Vol. 29
3. 小林明 (2015) 「留学体験のインパクトと経年変化 —社会人としての留学体験評価 (2) —」 独立行政法人日本学生支援機構ウェブマガジン『留学交流』2015年8月号 Vol. 53
4. 新見有紀子、太田浩、渡部由紀、秋庭裕子 (2016) 「グローバル人材育成と留学の中・長期的インパクトに関する研究 —留学経験者と留学未経験者に対するオンライン調査結果より—」『アジア文化研究』23号、pp. 3-25 2016年6月
5. 横田雅弘 (2015) 「グローバル人材育成と留学の長期的なインパクトに関する調査」 科研費プロジェクト「グローバル人材育成と留学の長期的なインパクトに関する比較調査研究」サマリーレポート 2015年9月
6. 米澤彰純、新見有紀子 (2016) 「留学体験の効果意味 —グローバル人材5000プロジェクトの調査結果から—」『IDE 現代の高等教育』No. 581、pp. 47-53 2016年6月
7. 文部科学省 (2011) 「資料2 グローバル人材の育成について」から引用  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2012/02/14/1316067\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/__icsFiles/afieldfile/2012/02/14/1316067_01.pdf) (2016年7月1日検索)